

『農民レベル 99』

この世界には神々から与えられる恩恵として“天職”というものがあつた。

天職を得れば、人類を脅かす様々な脅威と戦うための特別な力を持つことができる。そのため彼らは“戦士”と呼ばれ、人々の希望として持て囃されていた。

「おおきくなったら、ぼくも戦士になれるかな？」

辺境の小村に生まれた少年ルイスは、多くの子供たちと同様、そんな夢を抱いていた。

そして十歳のとき、幸運にも彼は天職を授かり――

「君の天職は……【農民】だ」

天職には様々な種類があるが、彼らが戦士と呼ばれている通り、必ず戦いに役立つ類のものだ。

例えば圧倒的な剣技で敵を打ち倒す【剣豪】。

例えば火や熱などに関する魔法を極める【赤魔導師】。

例えば治癒と近接戦闘の両方をこなせる【パラディン】。

例えば暗殺などを得意とする【アサシン】。

戦いへの貢献の仕方はそれぞれだが、非戦闘系の天職などあり得ない……はずだった。

【農民】は史上初となる唯一の例外。

戦士になりたいというルイスの夢は、あっさりと潰えた。

その悲しみの記憶を忘れようとするかのように、ひたすら農作業に没頭し……やがて十年の歳月が過ぎた。

「この辺りの大根はそろそろ収穫できそうだ」

二十歳となったルイスは、目の前の大根を見上げながら呟いた。

日々の農作業のお陰で、精悍な身体つきをした立派な青年へと成長を遂げている。

「よっと」

ルイスは近くの大根を片手で掴むと、そのまま引っ張り上げた。

土の奥深くまで埋まっていた大根の全貌が露わになる。

それは全長およそ二メートル、直径は太いところで七十センチ強という、化け物のような大根だった。

「うんうん、なかなか良い感じに育ってるな」

巨大なのはその一本だけではない。

その一帯にできた大根はどれもこれも、人間の大人を凌駕する大きさなのだ。

大きいだけあって、重量も相当なものがあるだろう。

にもかかわらず、ルイスは片手でひょいひょいと抜いていく。

百本以上あった巨大な大根を、あっという間に収穫し終えてしまったのだった。

無論、ルイスが作っているのは大根だけではない。

ジャガイモや玉ねぎ、トマト、カボチャ、ネギ、ピーマン、ナス、キャベツなど、色々な野菜を生産しているが、そのどれもがやはり巨大だ。

当然ながらルイス一人ではもちろん、彼の住むこの村だけでは消費し切れず、周辺の村々、いや、遠くの村や街にまで運ばれて、大勢の人々の胃袋を満たしていた。

「一体どういうことでしょうか？ この数年で、作物の生産量がこれほど増大しているなんて」

端正な顔立ちの美少女が、眉根を寄せながら疑問を呟いていた。

身に着けている衣服は決して華美なものではないが、それでも凜としたその姿からは庶民とは隔絶した気品が漂っている。

それもそのはず。彼女はここローゼンベイル王国の王族。しかも現国王の娘で、王位継承権を有する第七王女、セレスティア＝ローゼンベイルなのである。

そんな彼女だったが、つい先日、王国の辺境一帯を治める領主に任じられてしまう。

無論、栄転などではない。王位継承を狙う王子王女たちによる激しい政争に巻き込まれ、この辺境の地に追いやられるような形だった。

こんなど田舎ではいかなる実績をあげたところで、もはや王位に届く可能性は限りなくゼロに近い。

そんな状況にあって彼女は。

不敵で獰猛な笑みを浮かべる。

「(ふふふ……お兄様お姉様方……今に見ていてください。必ずやここから這い上がって王宮に舞い戻り、あなた方を蹴落として差し上げますから)」

ともあれ、まずは領主としての責務を果たさなければならない。

そこで前任者の残した資料などを確認しながら、地域の現状把握に努めていたところ、わずか数年で作物の生産量が大幅に増大していることを知ったのである。

さらに詳しく資料を見ていくと、作物の収穫量が増大を始めたのは、ちょうど十年ほど前からであることが分かった。

「以前はごくごく平均的な、いえ、むしろあまり芳しくない収穫量でしたが……当時と比べると今は三倍にもなっています。ですが人口は当時とほとんど変わらないし、何か革新的な農地改革があったとの記録もありません」

考えれば考えるほど疑念は深まるばかり。

そこで謎を確かめるべく、自ら調査に赴くことに。

その結果、彼女が辿り着いたのは。

「な、何ですか……この畑は……？」

信じがたいほど巨大な野菜がずらりと並ぶ、異様な畑だった。

葉や茎が鬱蒼と茂り、遠くから見るともはや森にしか見えない。

「グルアアアアアアアアアアアッ！！」

呆然とその場に立ち尽くしていたセレスティアだったが、空から響いてきた強烈な雄叫びで我に返った。

「ワイバーン！？」

全長十メートルに迫る空飛ぶ蜥蜴の魔物に、彼女は思わず絶叫する。

「こ、こんな魔物に出くわすとは……っ！？」

「殿下、お下がりくださいっ！」

護衛の兵士たちが慌てて前が出るが、武器を持つ手がガクガクと震えていた。

ワイバーンは、竜の一種とされる凶悪な魔物である。

ドラゴンほどではないが硬い鱗を持ち、その鋭い牙や爪で岩すらも引き裂く力を持つ。

幾ら鍛錬を積んでいるとはいえ、天職を持たない並の兵士たちでは、相当な兵数と準備がなければワイバーンを討伐することなど不可能だ。

絶望の表情を浮かべる彼女たちのもとへ、ワイバーンが猛スピードで滑空してくる。

そのときだ。彼女たちの目の前に一人の青年が割り込んできたのは。

無論セレスティアは知るはずもないが、この畑の主、ルイスである。

迫りくるワイバーンに対してまったく動じることなく、ルイスがどこからともなく取り出したのは、へたの部分が異様に長く伸びた巨大なカボチャだった。

ルイスはそのカボチャを振りかぶると、迫りくるワイバーンの横っ面に叩きつけた。巨体があっさり吹き飛び、何度も地面を転がっていく。

「……はい？」

意味不明な光景に、思わずそんな声を漏らしてしまうセレスティア。

「ワイバーンを一撃で吹き飛ばすなんて……そ、それに、何ですか、この不思議な武器は……まるでカボチャのような……」

「これはハンマーカボチャだ」

「ハンマーカボチャ！？」

ハンマー用に品種改良したカボチャ。それがハンマーカボチャである。へたの部分が柄のように硬く真っ直ぐ伸びているので、そこを持ち手にすることができた。

「っと、まだ死んでないか」

「グルァッ」

頑丈なワイバーンはどうやらあれだけでは死ななかつたらしい。よろめきながらも身を起こし、懲りずに躍りかかっている。

今度は槍のようなものを取り出すと、ルイスはそれをワイバーンの身体に突き刺し、トドメを刺した。

「ワイバーンの鱗をいとも簡単に貫くなんて！？ それにその槍は……」

「これは槍ニンジンだ」

「槍ニンジン！？」

槍として使えるように作った特殊なニンジンで、これもまたルイスが品種改良を施したものである。

「(い、意味不明なんですけど……ただ……ふふふ……この男……使えるかもしれません)」

【農民】のルイスと、第七王女セレスティア。

これが、のちに王国を、いや、世界を変革することになる二人の最初の出会いだった。